中間報告書

令和 8 年 8 月 30 日現在

1　事業名

ZOKU・ZOKU　食農教育を柱とする「いのちの広場」プロジェクト

2　実施期間

令和 8 年 5 月 1 日～令和 9 年 2 月 28 日

3　事業内容

①事業の目的・概要

少子・高齢化社会の到来に伴う生活環境の急激な変化や、地域コミュニティーの崩壊により、孤立・不登校・ひきこもりが増加している。制度や支援だけでは届かない人の存在に対して、地域資源を活かしながら、支援する/される関係ではなく、人と人が関係性を取り戻す居場所を創出する。

事業を通じて、以下の 3 つのコンセプトで展開している。

●共助：安心して集える居場所

●共創：世代を超えた体験と学び

●循環：自然・仕事・想いが回る仕組み

②事業の流れ・進捗状況等

【参加実績】

活動内容	参加者数	備　考
いのちの広場・竹林整備（定期開催）	40 名	継続実施
農作業	20 名	継続実施
加工販売（でんちゅう焼き等）	20 名	ボランティア販売
こもれびベース運営	20 名	各種イベント
ひきこもり支援	5 名	相談・送迎対応等

【対象別参加者】

●ひきこもり支援対象者：５名（８月３０日現在）

＜実施したこと＞

〇いのちの広場（定期開催）

多世代が安心して集える居場所として、定期的にクッキング・トライ広場（竹林整備）の実施。食、対話、体験を通じた学びと交流の場を提供。新たに整備した土地に新しい果実の木を植樹し、自然を活かした活動を拡大。

〇農作業

農業従事者との連携作業。にんにく、玉ねぎ、キャベツなどの植え付け、収穫などの手伝いを行う。

〇加工販売事業（新商品開発・販売開始）

既存の焼肉のタレに加え、新商品「でんちゅう焼き」を開発・販売。

【でんちゅう焼きの特徴】

形状：井原市マスコットキャラクター「でんちゅうくん」
（平櫛田中の代表作「鏡獅子」がモデル）の形

材料：米粉、備中大納言（希少豆）

製造プロセス：ひきこもり対象者があずき選別→地域の高齢者が加工
→高校生（元ひきこもり・不登校）がボランティア販売

販売開始：令和 8 年 8 月 22 日（毎週土曜日販売）毎週木・土曜販売中

〇こもれびベース運営

安心して過ごせる基盤を形成し提供。各種イベントを開催し、参加者のニーズに応じた多様な活動を展開。

【課題と工夫】

課題：ひきこもりの人が研修や外出活動に参加することには負担感があり、参加につながりにくい。

工夫：一過性の支援ではなく、段階的なステップアップアプローチを採用。

ステップ 1：いのちの広場で安心できる環境に慣れる

ステップ 2：竹林整備や加工販売などの具体的な活動で役割を担う

ステップ 3：その過程を通じて自分たちの役割と社会参加を実感

【成功事例：高校生の成長】

加工販売を担当する高校生たちは、元々ひきこもりや不登校の課題を抱えていた。地域の大人たちに支えられてきた経験を持つ。現在では、ボランティアから社会参加へと段階的に成長し、製造販売活動を担い、地域への貢献を実感できるようになっている。この成長の過程が本事業の最大の成果である。

＜今後、実施すること＞

〇加工販売の拡大

でんちゅう焼きなどの販売品目・販売量をさらに増加させ、より多くの利用者が関わることで、社会参加の機会を拡大。

〇高校生のアルバイト化

現在のボランティア活動をアルバイトへ移行し、経済的な自立と社会人としてのスキル習得を支援。

〇経営体制の構築

加工販売事業の拡大に伴い、アルバイト代が支払える持続可能な経営体制を整備。

〇家族心理教育基礎編の実施

令和 8 年 9 月から開始予定。ひきこもりの本人や家族が参加できる教育プログラムを実施。

〇こもれびベースの活動拡大

イベント・活動の種類と回数をさらに充実させ、より多くの人に安心できる居場所を提供。

〇利用者の拡大と関係性の深化

利用者の対象範囲を広げるとともに、継続的な参加を通じて、利用者同士・利用者と地域の大人との間の関係性をより深化させる。

③これまでの成果・効果、今年度事業終了後の成果・効果の見込み

【参加者の声から見える成果】

本事業における成果は、以下の 3 つの軸で整理される。

＜軸１：「役割実感」＞
定義：「自分にもできることがある」という自己有用感の獲得

【ひきこもり対象者からの声】
「自分にもできることがある」という実感が得られた。あずき選別など、本人の生活に合わせた対応により、自分のペースで役割を担うことができた。

【高校生ボランティアからの声】
「ボランティアを担えることで、自分にもできることがある」と実感。加工販売の企画・販売などを通じ、自分で考えて動ける幅があり、役割の明確化と自己有用感の向上につながっている。

＜軸２：「承認と自己肯定感の向上」＞
定義：地域の大人からの褒める・認める経験による心的変化

【子どもたちからの声】
「地域のおじいちゃんおばあちゃんと接することで褒めてもらえるので、自己肯定感が上がった」「自分のいいところをたくさん見つけてくれた」「褒めてくれたり喜んでくれたりするのが嬉しい」

成果：多世代交流を通じた承認経験が、自己肯定感の向上と心理的安定につながっている。

＜軸３：「心理的安全性と関係性の構築」＞
定義：「困った時に困ったと言える関係性」と「怖いと思わない環境」

【ひきこもり対象者からの声】
「わがままに寄り添ってもらえたことで、怖いと思わなくなった」「無理に引っ張り出させず、本人の生活に合わせた対応をしてくれた」「みんなが怖いんじゃないんだ、と気づいた」

【高校生からの声】
「ボランティアに余白があり、強制的な感覚がないので参加しやすい」「自分で考えて動ける幅がある」

成果：本人のペースや考えを尊重する関係づくりにより、心理的安全性が確保され、主体的な参加につながっている。

【今年度事業終了後の成果・効果の見込み】

⑴ ひきこもり対象者：段階的な社会参加の実現

本人のペースに合わせた役割体験を通じ、「自分にもできることがある」という自己有用感が定着。外出への不安が軽減し、次のステップ（例：家族心理教育基礎編参加）への参加につながる見込み。

⑵ 高校生ボランティア：自立と社会参加の加速

ボランティア活動からアルバイト化への移行により、経済的インセンティブと役割実感がさらに強化される。年度末までに、加工販売事業の安定化とアルバイト代の支給体制整備を完了し、持続的な参加と経済的自立の基盤を構築する見込み。

⑶ 多世代交流による地域づくり：心理社会的支援の定着

おじいちゃん、おばあちゃんなど地域の大人との関係性が深まり、「困った時に困ったと言える関係」が確立。これにより、孤立・不登校・ひきこもりの予防と支援が生活の一部として根付く環境が形成される見込み。

④課題等

【主な課題】

⑴ 参加のインセンティブ（対価）の課題

高校生ボランティアからの声として「対価があるともっと参加しやすい」という意見が出ている。現在のボランティア活動からアルバイト化への移行が、参加継続率向上と役割実感の深化につながる重要な課題である。

⑵ 成果の「見える化」と評価指標の設定

本事業の成果は「役割実感」「自己肯定感」「心理的安全性」といった定性的な変化にあり、数値化が難しい。参加者の主観的な変化をいかに可視化し、事業の価値を明確に示すかが課題である。

【対策・工夫】

⑴ アルバイト化による経済的インセンティブの導入

年度末までに、加工販売事業の売上拡大とアルバイト代が支払える経営体制を整備し、参加者の経済的自立と事業の持続可能性を両立させる。

⑵ 参加者の声を集めた「ストーリー集」の作成

参加者の「Before→Experience→After」のストーリーを冊子化し、数値で

は測れない成果を定性的に可視化する。インタビューや記録・観察を通じ、個別の変化過程を記録し、事業の価値と効果を明確にする。

【具体的な評価方法】

⑴ インタビュー調査

ひきこもり対象者：「参加する前と後で何が変わったか」「怖いと感じたことはあるか」「自分でできたことは何か」などの質問を通じ、心理的変化と役割実感を把握。

高校生ボランティア：「やりがいを感じるのはどんな時か」「自分で決められることはあるか」「将来このプロジェクトに関わりたいか」などから、参加継続率向上の要因と今後の参加意欲を測定。

⑵ 記録・観察

活動時の表情・態度の変化、参加回数の推移、役割の拡大、地域の大人との交流場面などを継続的に記録し、定量的・定性的な成果の変化を追跡する。

⑶ ストーリー集の作成

個別の参加者ストーリーを通じ、「役割実感」「自己肯定感の向上」「心理的安全性」の 3 軸での変化を具体的に示す。他地域への応用可能性も含め、事業モデルの価値を発信する。

4　参考事項・資料

・収支精算書見込
・いのちの広場　記録写真
・でんちゅう焼きチラシ
・家族心理教育基礎編チラシ
・シェアシェア　KOMOBE

5　次年度以後の事業展開

次年度の事業展開	事業展開の方向性 （以下のチェック欄のいずれかに「✓」を記入してください。）
	☑ 提案団体の自主事業として収益を得て継続・拡大していくことを目指す。 ☐ 備中地域みらいづくり支援事業として事業を継続しつつ、次々年度の自主事業化へ備える。 ☐ その他 （　　）

	中期的な目標を実現させるための具体的な事業の内容
	令和 9 年度は、令和 8 年度で構築した基盤をもとに、加工販売事業の自立経営化を目指す。高校生のアルバイト化により、事業の継続性と参加者のスキル習得を両立させる。また、家族心理教育基礎編の実績を踏まえ、より多くのひきこもり当事者・家族層への支援を拡張する。また、加工販売事業（でんちゅうやき等）の拡大により、利用者のアルバイト代が支払える経営体制を構築。自助・共助・共創の理念を実践しながら、地域未来モデルとして自立的に継続する。 3 年目以降のビジョンとして、 1. 加工販売事業の安定化を図る。でんちゅうやきなどの販売品目をさらに増やし、月次の安定的な収入を確保。ひきこもり対象者から高校生への段階的なステップアップを通じた人材育成を継続する。 2. 地域未来モデルの確立。いのちの広場、竹林整備、加工販売などの活動が、地域の自然・人・仕事が循環する仕組みとして根付く。不登校・ひきこもりの予防と支援が生活の一部となった地域社会の実現に近づける。 3. 広域展開として、井原市から備中地域全体への事業展開を目指し、モデルの他地域への横展開を検討していく。